第４学年すくすく４　国語科学習指導案

授業者　小笠原　知輝

１　単元名

これが私の数え方！「数え方を生み出そう」

２　主張点

・　児童が自分の考えを表現する際に、写真やイラスト・定型文等の支援ツールを選択・活用できる環境を整える。児童が自分に合った方法を用いることで、考えを整理し、安心して表現できるようにする。

・　根拠となる視点を基にカード同士を結ぶ活動を取り入れることで、自分の考えを可視化・整理し、考えを深めることができるようにする。

３　単元について

本単元の重点指導事項は、学習指導要領における〔思考力、判断力、表現力等〕の「C読むこと」(1)カ「文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くこと。」である。

児童は、これまでの説明的な文章の学習で、筆者の考えと理由や事例の関係を押さえた上で、文章全体の内容を正確に把握する学習に取り組んできた。それらの経験を生かして、本単元では、文章の構成を確かめ、そこから筆者の伝えたいことの中心を捉える。話し合いを通して、友だちの考えに触れることで、互いの考えの違いに気付き、自分の考えが広がっていくことを感じられるようにしていきたい。

本単元の言語活動として、新しい数え方を考えて発表し、話し合うことを設定している。日本語の数え方にほとんどない「色やにおい」などの特徴を使って新しい数え方を作り、理由とともに発表する。そして、その数え方についての感想を話し合う。ここでの感想は、数え方を考えた理由に対して納得できる点や疑問に思う点が考えられる。話し合いを通して、筆者の主張する「ものの見方の広がり」を実感し、これからの学習に生かそうという意識を高めたい。

本教材は、普段意識することなく用いている日本語の「数え方(助数詞)」を話題に、日本語について筆者の考察を述べたものである。まず序論において助数詞という話題が提示される。本論では、(1)アメリカで日本語の勉強をしている小学生が、数え方を自由に生み出す場面に出会った筆者の経験をもとにした、ニンジンの数え方の違い、(2)日本語の数え方の役割・問題点、(3)明治や昭和の例をもとに新たに数え方が生み出されているということ、の三つを述べている。結論では、これまでの数え方を大切にしつつ、数え方を新たに生み出すことによって、ものの見方を広げようという主張がなされる。筆者が「新しい数え方を生み出してみませんか。」と呼び掛けていることから、言語活動につながる提案が明確に示されており、自分の考えを広げ、発表し、感想を話し合うという児童の課題に即した教材であるといえる。

また、本単元の指導に当たっては、児童の身体の動きの状態や認知の特性、各教科の内容の習得状況等を考慮し、指導内容を適切に設定し、重点を置く事項に時間を多く配当するなど計画的に指導していく。さらに、『小学校学習指導要領　国語編』における「読むこと」の指導方針に基づき、文章の構成や筆者の考えを捉えたうえで、一人一人の感じ方や考え方の違いに気付き、自分の考えを広げたり深めたりする言語活動を設定することで、児童が自分の思いや考えを明確に表現し、互いに共有し合えるようにする。

４　単元に出会う前の児童の実態

本学級の児童は、男児童２名、女児童１名の計３名の４年生である。ワークシートを作成したり、発問の仕方を変えたりしながら支援を行うようにしている。

国語科は３人とも特別支援学級で学習を行っている。国語科の学習には、楽しみながら参加しており、普段の学習から自分の思ったことを呟く場面や積極的に発表しようという姿勢が多々見られる。しかし、自分の考えや気持ちを表現しようとしても、言葉や説明が足りておらず、聞き手に伝えたいことが伝わっていない場面も見られる。国語に関するアンケートによると、児童自身、自分の考えを友だちに説明することに対して、苦手意識をもっている。一方で、「自分の考えを図や表に整理すると、分かりやすくなると思いますか？」という質問に関しては全員が「そう思う」と回答している。４年生で初めて学習した「ヤドカリとイソギンチャク」では、「中」の部分で述べられていた実験

の様子を表にしてまとめることで、思考が整理しやすくなることを経験している。また、理科の学習では、思考操作を行いながら、半月と満月の共通点・相違点を見付ける活動にも取り組み、多数の情報をまとめるためには図に表すこともできるという経験もしてきている。

『特別支援学校学習指導要領解説』によると、特に、知的障がいのある児童については、学習によって得た知識や技能が断片的なものになりやすく、実際の生活の場面の中で生かすことが難しいという学習上の特性がある。さらに、特別支援学級における国語指導の配慮事項にあるように、自分の考えや気持ちを言葉で順序立てて説明することに困難さをもつ児童に対しては、思考を可視化する図や表、話の組み立てを支える定型文等の視覚的・構造的な支援を段階的に取り入れ、伝え合いに対する苦手意識を軽減し、達成感をもたせることが大切である。

これらのことから、本単元では、友だちに自分の考えを説明することに苦手意識をもっている児童が図や表を用いることで自分の思考を可視化・整理し、他者に自分の考えを伝えられるようにしたい。

【個の実態、特性等は別紙参照】

5　研究主題「自ら問いをもち　多様な他者と協働し　未来をつくり出すかめっこの育成～一人一人が目を輝かせ、学びを楽しむ子をめざして～」を実現させるために

主張点①を達成するための手立て

本単元では、児童一人一人が自分に合った方法で学習に取り組み、自分の考えを表現できるようにするため、写真やイラスト、定型文等の支援ツールを用いる。児童が必要に応じて選択・活用できる環境を整える。児童生徒が興味や関心、得意な面に着目し、教材・教具、補助用具などを工夫するとともに、目的が達成しやすいように、段階的な学習を行うなどして、児童の学習活動への意欲が続くよう支援する。国語科における言語活動の充実を図るため、思いや考えを形成し表現する手掛かりとなる写真・イラストや、文の構造・関係を示す定型文等を提示し、児童が自分の学習状況や得意・不得意に応じて選択・調整できる環境を整える。

物の特徴を捉えたり、数え方を考えたりする際には、実物やその写真、イラストを提示する。文字情報だけでは物の特徴を捉えることが難しい児童も、視覚的な情報を手掛かりにすることで、「色」「におい」「かたさ」「手触り」などに着目できるようにする。また、写真やイラストに直接書き込んだり、気付いた特徴に印を付けたりすることで、自分が注目した部分を明確にできるようにする。自分が考えた数え方とその理由を説明する場面では、児童が必要に応じて活用できる定型文を提示する。「私のヘチマの数え方は～です。理由は、ポイントの〇〇を使った□□が、△△だと思ったからです。」と文型を示すことで、考えを言葉にすることに困難を感じる児童も、自分の考えを整理しながら説明できるようにする。一方で、定型文をそのまま使用するのではなく、自分で文章を組み立てられる児童は、定型文を使わずに説明するなど、必要な支援の程度を自分で調整できるようにする。

また、本学級では常時活動として、写真からその場面の様子やイメージを膨らませ、オノマトペを集めたり、作り出したりする音図鑑の作成に取り組んでいる。活動を始めたきっかけは、自分の気持ちや物事の様子を言葉で説明することが苦手な本学級の児童にとって、音や動き、感触、様子などを感覚的に捉えやすくするオノマトペが表現の幅を広げる手掛かりになると考えたからである。オノマトペには必ずしも正解があるわけではない。そのため、どんな意見でも自信をもって発表することができる。音図鑑の作成にあたり、自分の想像していたものと異なる音を出した児童に対し、「これって、なんでこの音なの？」と質問している様子が見られた。オノマトペは感覚的な表現だからこそ、友だちの感じたことに「なるほど。そう感じたんだね。」と自分とは異なる意見を認める姿があった。他者の意見に対して、認めないのではなく、納得できる点を見つけ、自分の考えや感じ方の幅を広げていくことのできる音図鑑の作成は、本学級の児童にとって効果的であったといえる。

このように、写真やイラスト、定型文等の複数の支援ツールを用いることで、児童が学習内容や自分の得意に応じて必要な支援を選択できるようにする。また、学習の途中で自分の学習状況を振り返り、支援ツールを変更・追加・減らすことができるようにすることで、児童が自分に合った学び方を選び、調整することができる環境を整えたい。また、写真やイラストなどの視覚的な支援ツールとオノマトペを組み合わせることで、言葉と実際の様子が結び付けやすくなり、自分なりの表現を広げることが期待できる。

主張点②を達成するための手立て

本学級の児童は、自分なりの考えをもつことができているが、自分の思考が整理できていないまま話し出してしまう一面がある。しかし、教師による問い掛けがあると一つ一つ話すことができている。

そこで、本単元では、具体物を見る、触れるなどの体験的な活動を効果的に取り入れ、感じたことや気付いたこと、特徴などを言語化し、言葉の意味付けや言語概念等の形成を的確に図る学習を行う。国語科で培う「言葉による見方・考え方」を働かせ、根拠となる視点を基にカード同士を結ぶ活動を通して考えを可視化・構造化することにより、自分の考えの根拠を明確にし、筋道立てて説明・共有する力を育てる。児童が物の特徴に着目し、自分なりの数え方を考えるとともに、その考えを整理して他者に説明できるようにするため、思考操作を取り入れた学習活動を設定する。

思考操作を行うことで、頭の中にある曖昧な考えをカードや図、線、矢印などを用いて目に見える形に表すことができる。考えを可視化することで、自分が何に着目して考えたのかを振り返ったり、複数の考えの共通点や相違点を見付けたりすることができる。このような学習を基盤にして、知識や技能の着実な習得を図りながら、児童の障がいの状態や発達の段階に応じた思考力、判断力、表現力等を育成し、学びを深めていく。また、考えを分類したり、比較したり、関連付けたりする中で、これまで気付かなかった考えのつながりや関係性に気付くことができる。

さらに、考えを整理・構造化することで、「自分はなぜそのように考えたのか」という根拠や思考の過程を明確にすることができる。そのため、単に答えを出すだけでなく、自分の考えを筋道立てて説明したり、友だちの考えと比較して自分の考えを見直したりすることができる。

自分なりの考えをもつことができているからこそ、思考操作を行うことでこれまでの教師による問い掛けによって伝えられていたものが、自分の言葉で伝えることができたという達成感・自己肯定感にもつながる。また、自身の思考を整理できるようになるからこそ、他者の発表に対して「どう考えたのか、もっと聞いてみたい。」「自分とは○○が違うのはどうしてだろう。」と関心をもつことができると考える。

6　評価規準、単元構成

（Ⅰ）　評価規準（A児・B児）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
① 考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報との関係をワークシートの図式や定型文を用いて理解している。	① 「読むこと」において、目的を意識して、文章中から中心となる語や文を見つけ、抜き出して短くまとめることができる。 ② 「読むこと」において、文章を読んで感じたことや考えたことに共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付いている。	① 進んで筆者の考えから自分の考えを広げ、学習の見通しをもって日本語の数え方について考えようとしている。 ② 視覚的なスケジュールやワークシートの手順を手掛かりにし、学習の見通しをもって自分なりの新しい数え方を考えようとしている。

評価規準（C児）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
① 具体物や写真に写る物の形や特徴とそれに合う数え方を教師が提示した写真や絵カードとの組み合わせを通して理解している。	① 教師と一緒に短い文章や写真を見ながら、目的に合わせて大切な言葉のカードを選んだり、さしたりしてまとめている。 ② 友だちの発表を聞いて、自分とは違う数え方があることやその面白さに気付き、いろいろな考え方があることを楽しんで受け入れている。	① 視覚的なスケジュールやワークシートの手順を手掛かりに、次の行動への見通しをもち、具体物や写真に写る物を見ながら、教師や友だちと一緒に楽しみながら考えようとしている。

（２）　単元構成

時	学習の流れ	単元を通して行う働きかけ	評価の重点		
			知	思	態
1	〈オリエンテーション〉 身近なものの数え方を確認するとともに、本文を読んで、単元の問いを立てる。	・身近にある文房具を用いて数え方を確認し、数え方の違いに気付くことで、興味・関心を高めるようにする。			② ①
2	段落同士のまとまりを捉え、筆者の伝えたいことの中心を考える。	・「はじめ」「中」「おわり」に分ける際には、既習事項（つなぎの言葉、事例、筆者の主張など）を想起させ、「中」が３つのまとまりに分けられるようにする。 ・「中」の分かれ目について迷う児童には、⑧段落以降は「新しく生み出す」ことに視点が置かれていることに着目できるようにする。		① ①	
3	中①の事例を表で整理し、筆者の考えをまとめる。	・ニンジンの数え方について、日本人とアメリカの子どもたちの数え方の違いを表にまとめることで捉えられるようにする。 ・アメリカの子どもたちは、ニンジンの他の特徴にも着目して数え方を生み出していることを読み取り、筆者の主張の根拠の１つになっていることに気付くことができるようにする。		① ①	
4	中②の事例を表で整理し、筆者の考えをまとめる。	・日本語の数え方の役割について知るため、本文の事例をもとに資料の「座」「膳」「棹」についても同様にまとめ、昔から伝わる日本語の数え方が様々あることに気付くことができるようにする。		① ①	
5	中③の事例を表で整理し、筆者の考えをまとめる。	・明治から昭和にかけて新しい数え方が生み出された事例を表にまとめ、日本語の数え方も外国の数え方のように新しい特徴に着目すると便利で表情豊かな数え方になると読み取ることができるようにする。		① ①	
6	中①～③の説明と筆者の考えとの結び付きを読み取る。	・筆者の考えと結び付きを理解することが難しい児童には、まとまりに分けた時に学習した「筆者の伝えたいことの中心」を想起することで、それが「筆者の考え」であることに気付くことができるようにする。		② ①	
7 （本時）	筆者の主張を活かして、ヘチマの新しい数え方を全員で考え、自分の呼びたい	・児童が共通体験を想起し、考えやすいように身近な具体物（ヘチマ）を通してオリジナ	① ①		

	へチマの数え方を発表する。	ルの数え方を考えていく。 ・筆者の考えをもとにして、数え方が作られるようにヒントカードの用意や発表するための定型文を用意する。			
8	自分が見つけた物で、筆者の主張を活かして、新しい数え方を考える。	・前時での活動をもとに、ヒントカードや定型文を用いた活動に取り組む。 ・日常生活において自分が気になった物や生き物の写真を集めておく。 ・写真が撮れなかった児童のために、いくつか具体物を用意しておく。		①	①
9	自分で考えた新しい数え方を発表し、考えたことや思ったことを伝え合う。	・発表者に感想が伝えられない児童に対しては、友だちが考えた数え方が「色、におい、かたさ、手ざわり、温度、味、古さ、好ききらい」などのどれに当たるのかを考えて伝えるよう助言する。 ・発表のスライドは Koko ミマイを活用することで児童間での共有を可能とし、自分の考えとの違いや同じところを見つけ、考えを広げられるようにする。	①	②	
10	単元で学習したことを振り返り、どのように自分の考えが広がったかを確かめることができる。	・自分の考えを広げるきっかけになった人の意見を書き、どのように広がったかを伝えられるようにする。 ・自分の考え方の変化が捉えられない児童に対しては、教材文を読んだり友だちの考えを聞いたりして「なるほど。」「自分は気づかなかった。」など思ったことはないか尋ね、その思い自体が、考えが広がったことになるのだと伝える。		②	①

7　本時の学習指導（A 児・B 児）

（1）　目標

思考操作を通して、筆者の考えをもとに自身の考えを整理・可視化し、根拠とともに発表することができる。知－①、思－①（A 児）

思考操作と定型文を活用することで、自身の考えの根拠を含んだ発表をすることができる。知－①、思－①（B 児）

（2）　学習指導計画

学習活動	児童の意識の流れ	教師の援助
1 音図鑑の作成をする。	（A 児）校庭で遊んでいる人達から「わいわい」の音がしそうだ。 （B 児）ドッチボールをしている人からは「えいっ」って言ってそうだよ。	・常時活動で行っている音図鑑を作成する。
2 前時の内容を振り返り、本時の課題を確認する。	同じニンジンでも、アメリカには決まった数え方がなかったよ。 数える物の特徴に注目して、新しい数え方を生み出せるみたいだな。 ㊐自分だけのヘチマの数え方を決めたい。	・前時の内容を振り返り、筆者の主張を想起する時間を設ける。 ・筆者の叙述をもとに数え方のポイントを黒板に掲示し、視覚的に捉えられるようにする。
3 筆者の考えをもとに数え方のポイントを確認する。	他にも、叩いた時や振ってみた時の音も特徴になるんじゃないかな。 色・におい・かたさ、手ざわり、温度、味、古さ、好ききらいがあったな。	・児童が共通体験を想起し、考えやすいように身近な具体物を提示する。（今回は理科で学習したヘチマを使用する。）
4 ポイントをもとにヘチマの数え方を考える。（全体交流）	僕は特徴を見つけるために、実際に触ってみようかな。 僕は、色を使って考えてみようかな。他にどんな色があるのかな。	・交流の場面を取り入れることで、特徴を掴めていない児童が発想を得る機会を設ける。
5 生み出した数え方の中から自分の数えたいヘチマの数え方を発表する。	「私のヘチマの数え方は～です。 理由は、ポイントの○○を使った□□が、△△だと思ったからです。」 友だちが考えた数え方も面白い数え方がたくさんあったな。 定型文があったことで、上手く発表することができたよ。 ㋩1 つの物からいくつもの数え方を生み出すことができる。同じポイントを使っていても、人によって感じ方が違う。	・発表の際には、定型文を用いることで発表が苦手な児童も発表しやすい環境を設定する。 ・必要に応じて発表の原稿を作成する。 ㋭カード同士を結ぶ操作や定型文を活用し、聞き手に分かりやすく自分の考えを発表することができている。知－① 筆者の考えをもとに自分の考えを広げようとしている。思－①
6 本時を振り返り、次時の課題を考える。	次は○○さんが注目していたポイントを使ってみようかな。 触り心地で考えた○○さんの数え方は面白かったな。 今日みたいに考えてみたら、自分が写真に撮った物の数え方も生み出せるかもしれないよ。	・次時での活動は、これまで自分が写真で集めたもので考えることを伝え、学習意欲を高める。

7　本時の学習指導（C児）

（1）　目標

具体物の形や特徴とそれに合うカードを選択し、組み合わせる活動を通して、目的に合った言葉を選び、短い文章を考えることができる。知－①

（2）　学習指導計画

学習活動	児童の意識の流れ	教師の援助
1 音図鑑の作成をする。	（C児） ボールを投げているから「ビュン」って音がしようだな。 （A児・B児） 校庭で遊んでいる人達から「わいわい」の音がしそうだ。	・常時活動で行っている音図鑑を作成する。(T1)
2 前時の内容を振り返り、本時の課題を確認する。	細長いという特徴だけを数え方のもとにする発想はアメリカにはなかったな。 数える物の特徴に注目して、新しい数え方を生み出せるみたいだな。 問 自分だけのヘチマの数え方を決めたい。	・前時の内容を振り返り、筆者の主張を想起する時間を設ける。(T1) ・筆者の叙述をもとに数え方のポイントを黒板に掲示し、視覚的に捉えられるようにする。(T1)
3 筆者の考えをもとに数え方のポイントを確認する。	ニンジンの時は色、かたさ、好ききらいで数えていたな。 色・におい・かたさ、手ざわり、温度、味、古さ、好ききらいがあったな。	・児童が共通体験を想起し、考えやすいように身近な具体物を提示する。(T1)(今回は理科で学習したヘチマを使用する。)
4 ポイントをもとにヘチマの数え方を考える。 （全体交流）	私は、目を使う数え方を考えてみようかな。 僕は特徴を見つけるために、実際に触ってみようかな。	・数え方を生み出す際、どのポイントを使うのか教師と話したり、クラスで作った音図鑑を振り返ったりすることで考えられるようにする。(T2) ・交流の場面を取り入れることで、特徴が掴めていない児童が発想を得る機会を設ける。(T1)
5 生み出した数え方の中から自分の数えたいヘチマの数え方を発表する。	「私のヘチマの数え方は～です。 理由は、ポイントの○○を使った□□が、△△だと思ったからです。」	・発表の際には、定型文を用いることで発表が苦手な児童も発表しやすい環境を設定する。(T1) ・定型文を活用し、発表する原稿を作成する。(T2)
6 本時を振り返り、次時の課題を考える。	原稿を作ったことで発表がしやすかったな。 友だちが考えた数え方も面白い数え方がたくさんあったな。 ま 1つの物からいくつもの数え方を生み出すことができる。同じポイントを使っていても、人によって感じ方が違う。 図やイラストがあれば、自分でも数え方を考えることができたよ。 触り心地で考えた○○さんの数え方は面白かったな。 今日みたいに考えてみたら、自分が写真に撮った物の数え方も生み出せるかもしれないね。	評 具体物の形やそれに合うカードを選択し、特徴と数え方の組み合わせを伝えることができる。知－① ・次時での活動は、これまで自分が写真で集めたもので考えることを伝え、学習意欲を高める。(T1)

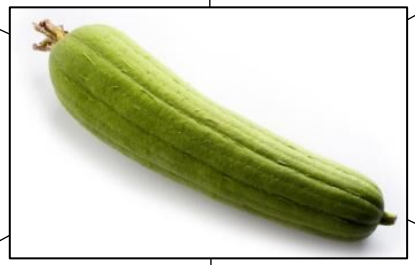
問 自分だけのヘチマの数え方を決めたい。



色
↓
緑



さわる
↓
ザラザラ



におう
↓
なし

かじる
↓
シャキシャキ



さわった時の音
↓
ザラザラ



さわった時
↓
ザラザラ
↓
きらい



ま 一つの物からいくつもの数え方を生み出すことができる。
同じポイントを使っていても、人によって感じ方がちがう。